

3. 花岡 2 遺跡の北海道式石冠について

花岡 2 遺跡から検出した北海道式石冠について、出土状況、形態の特徴、未製品、使用状況についていくつかの特徴が見られた。遺構からの遺物出土状況と、包含層から出土した北海式道石冠について以下にまとめる。

石材 用いるのは主に安山岩、流紋岩で山形の手頃な自然礫を用いる。安山岩、流紋岩は遺跡が立地する国縫地方の貫入岩として存在し、比較的容易に手に入りやすい石材である。

形態 形の違いにより次の 2 種類にわけられる。

- a. 全面敲打し、全体的に頭部も胴部も角張った形態を持つもの
- b. 手頃で山形の自然礫に溝だけを巡らし北海道式石冠の形にするもの

形態 a については H-2 から出土した未製品の製作工程から、使用状況、機能部の縮小までの過程がうかがえる（図Ⅶ-3-1）。1. 手頃な自然礫を用い、2. 礫皮表面の打ち欠き、敲打調整し、3. 全面敲打調整を施す。完成まもなくの形態 a の北海道式石冠は、溝から機能面までの長さが把握部の 1.5～2 倍はある。4. 使用開始となる。完成まもなくは溝から機能面まで長さがあったものが、機能面の摩耗と剥離、剥落が進み、把握部に近くなっていくと 5. 機能面の縮小、把握部のみの残存となる。

形態 b（図Ⅶ-3-2）については 1. 手頃で山形の自然礫に溝だけを巡らし北海道式石冠の形にするものであり、使用により剥離、剥落が生じ、2. 機能部の縮小、把握部のみの残存となる。遺跡から出土した北海道式石冠は、破損したものを除いて形態 a が圧倒的に多く、形態 b は掲載した 2 点である。

形態の違いについては住居の床面（H-2）から形態 a、b が同じ床面上から検出されているので、時期による差異ではない。その他に、破損品を転用しているものがある。溝から機能面にかけて割れている部分をたたき石に転用したり、全面に敲打を施したものがある。

その他の形態のものは、全面敲打調整で、溝があり半円形を呈しているものや、小型のもの、1 点だけ出土している花崗岩製のものも、その他の形態に含めた。大きく見て、形態 a の範疇に含まれるものもある。

使用状況 使用したものについて、3 つの状況がみられる。

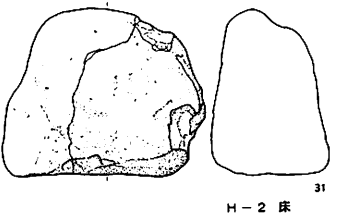
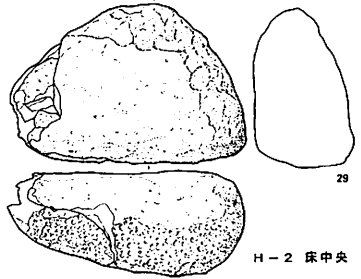
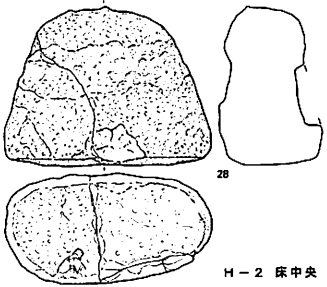
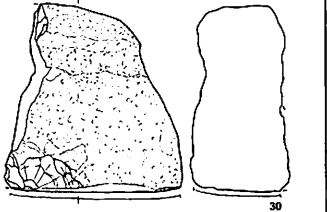
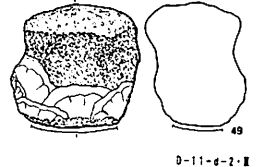
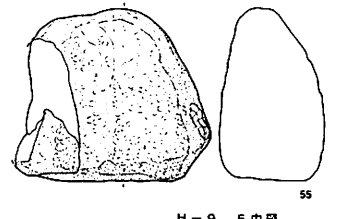
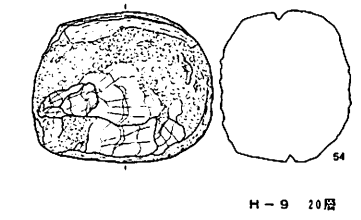
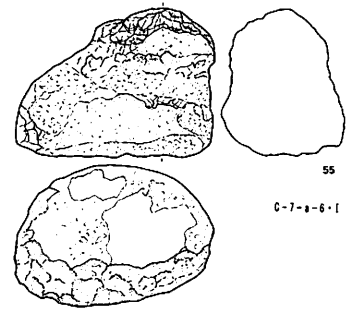
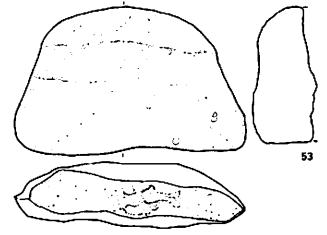
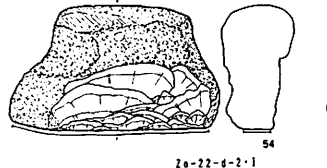
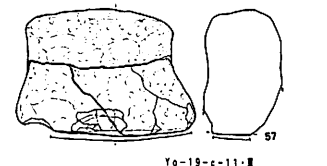
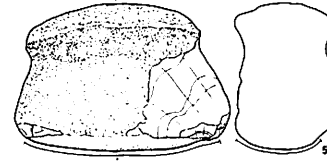
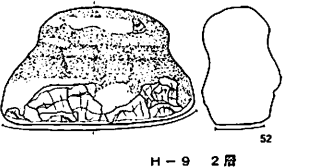
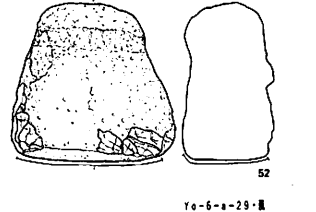
- ①機能面（擦り面）のみを有するもの—これは片減りではなく、擦り面はほぼ平坦である。
 - ②機能面（擦り面）から剥落、剥離のみられるもの—機能面から溝の方（エッジ部分）へ向かい、剥離、剥落の痕跡がみられるもの
 - ③機能面（擦り面）から、溝へ向けて（エッジ部分）の剥落・剥離が機能面をほぼ全周するもの
- 使用状況②、③の、どうしてこのような剥離、剥落が生じたのかについて、二つのことが考えられる。

- 1. 対象物を叩き潰すなどの目的によって生じた剥離・剥落
- 2. 機能面の平坦面の確保と幅や大きさを調整し、利便性を高めるための剥離

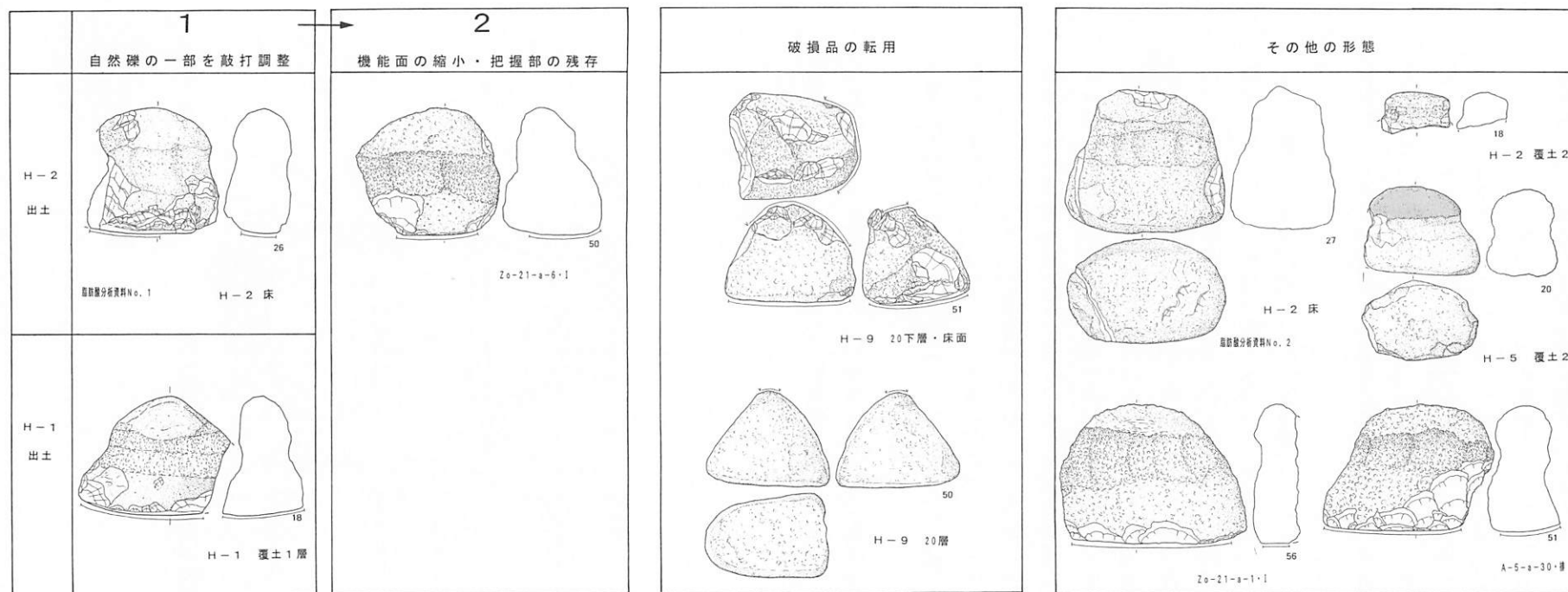
使用状況②、③は形態 a、b に共通してみられる。このことを、H-2 の遺物出土状況から見ていく。

H-2 この住居跡は中央が浅く窪むもので、そこからは北海道式石冠とその台石が出土している（図Ⅶ-3-3）。これらは残存脂肪酸分析を依頼し、成果が得られている（図Ⅵ- ）。

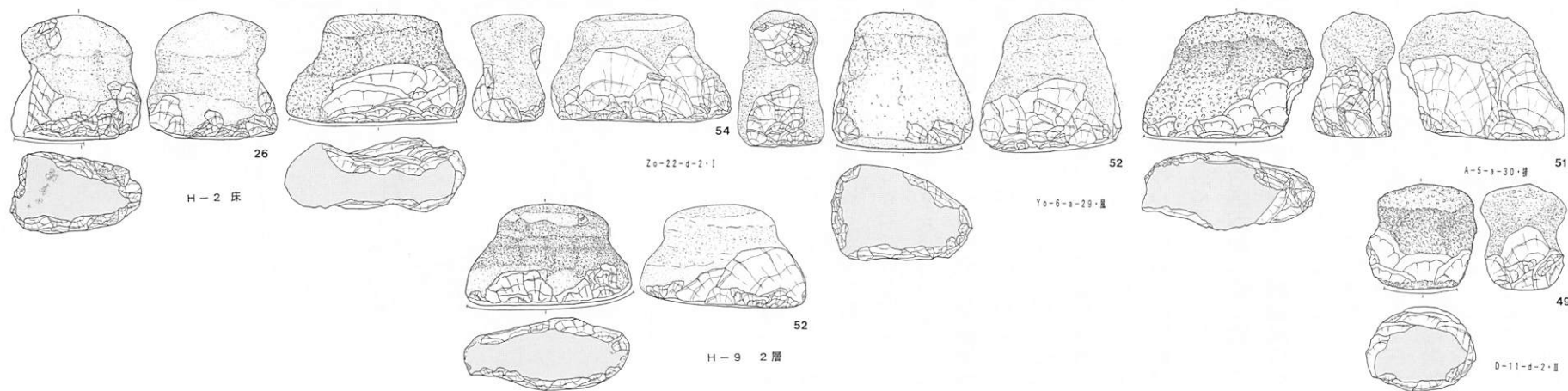
この北海道式石冠は形態 a で、使用状況が③のものと同じ残存脂肪を持っていた凝灰岩製の台石は板状のものである。この台石を検出した状況では、表面風化が著しく脆かったが、叩くなどの強い衝撃を受けた痕跡は見うけられなかった。またこれは凝灰岩製の板状礫で厚さ 10cm 程度のものあり、主

	1 手頃な自然礫を用いる	2 礫皮表面の打ち欠き・敲打調整	3 全面敲打調整	4 使用開始一剥離・剥落・破損	5 機能面の縮小・把握部の残存
H-2 出土					
H-9 包含層 出土		 		  	 

図Ⅶ-3-1 形態aの北海道式石冠・制作過程及び使用状況



図Ⅶ-3-2 形態bの北海道式石冠・破損品・その他の形態



図Ⅶ-3-3 機能面と剥離・剥落

に擦ることを目的に利用されたと考える方が妥当なものである。遺物の出土状況から見ると、北海道式石冠と台石は比較的近接して出土しており、この組み合わせで使用されていたと考えられる。

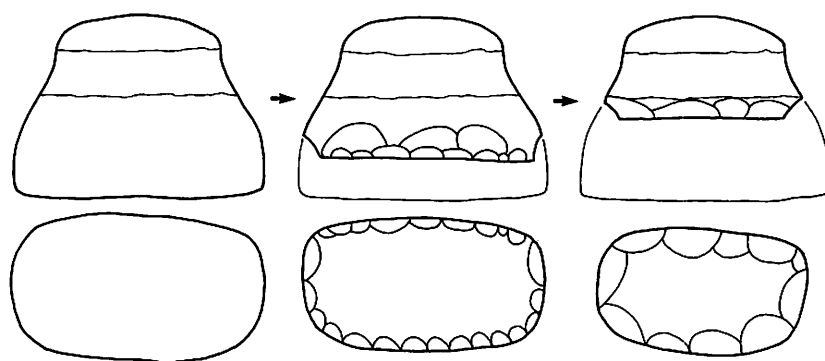
この凝灰岩で板状のものに剥落、剥離が生じるほど強い力で、敲く、あるいはたたきながら擦る目的で北海道式石冠を使用した場合、台となる凝灰岩板状礫は破損しやすいものである。また、敲く目的で使用した場合、対象物に礫片が混入しやすい状況が想定される。この状況から、H-2床面の出土状況と北海道式石冠の使用状況③の剥離、剥落を考えると、2. 機能面の平坦面を確保し、利便性を高めるための剥離ということが妥当と考えられる。

H-2の未製品 この住居の床面からは使用しているもの、未製品が両方出土している。使用しているもの、特に残存脂肪酸分析により脂肪の検出があった資料は、安山岩、花崗岩製で、その他の未製品はすべて流紋岩である。また、形態としてはaに属するものが流紋岩未製品であり、使用しているものは形態bである。ここでは用途に応じ、対象物を限定して、形態、素材の差異が生じているということも考えられる。また、H-2床面からは北海道式石冠を製作するための道具として、たたき石、石斧未製品を転用しているたたき石、石斧破損品の刃部を転用している鑿のようなものが出土している。北海道式石冠の未製品には打ち欠きに近い敲打調整が加えられる。薄く礫皮表面を剥離する道具の一つとして、たたき石と鑿的なものの組み合わせで使用しているものと想定される。

H-2床面から出土したその他の礫石器 石鋸、砥石、埋設の台石がある。石鋸については石鋸そのものと、石鋸に打ち欠きを施しているものがある。埋設の台石については幅の広い皿状の面を持つが、明瞭な擦り面は見られない。

今回、花岡2遺跡から出土した北海道式石冠は住居跡からの出土が多く、その製作から使用状況にいたるまでのものがみられたことは成果である。また、残存脂肪酸分析により、対象となる動植物がある程度、特定できた。

(袖岡 淳子)



図Ⅶ-3-4 北海道式石冠の使用状況模式図